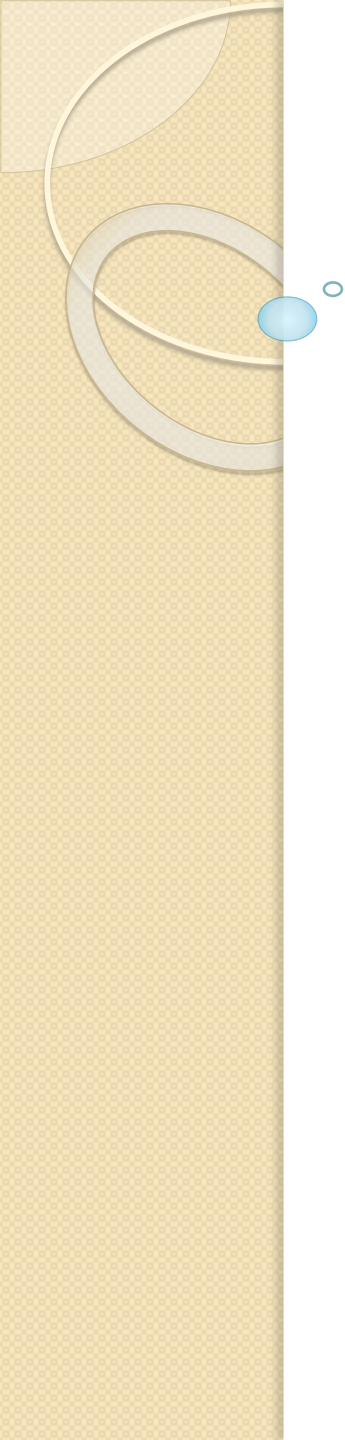




私たちが知らない SFミステリの世界

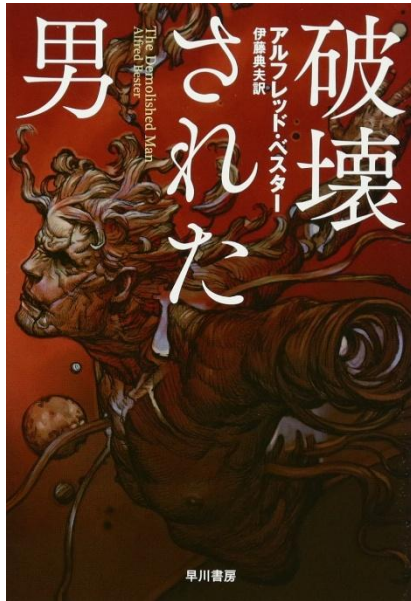
渡辺英樹・睦夫・るり・作成

翻訳ミステリ読書会 2025年2月22日（土）

『破壊された男』 (1953)

アルフレッド・ベスター

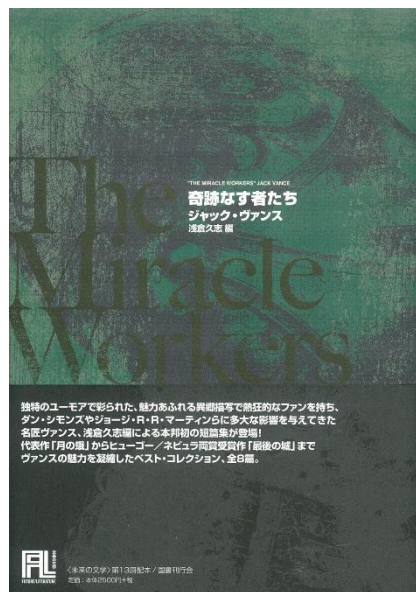
(1965年5月／早川書房→2017年1月／伊藤典夫・訳／ハヤカワ文庫SF)



- 等級によってランクづけされたエスパーが警察や病院など社会のあちこちに進出し犯罪も減少している二十四世紀、物産会社社長ベン・ライクによって不敵にも七十年ぶりに重犯罪が行われた！ ライバル会社の社長を周到な計画のもとに殺したのだ。一級エスパー、パウエル刑事とライクとの熾烈な戦いの火蓋が切って落とされる……。 **倒叙ミステリ**の形をとってはいるが、ライクの動機は無茶苦茶だし伏線はないし、ミステリとしては明らかに失格だろう。しかし、まさに叩きつけるような独自の文体、華麗なるデカダンス、全体にみなぎる異様なまでの熱気、壮絶なクライマックスは、五十年経った今でも全く古びておらず、読者を決して飽きさせない。**SFミステリとして破格の傑作**である。（担当・渡辺睦）

『奇跡なす者たち』 (2011)

ジャック・ヴァンス (2011年9月／浅倉久志・他訳／国書刊行会)



- 惑星シレーヌの住民はすべて**仮面をかぶった誇り高い人々**だった。さらに**複雑な音楽言語**を駆使して会話をしていた。人間関係や状況に応じて、使うべき仮面や楽器が決まっており、誤った使い方をすると命を失うこともある。赴任したばかりの領事代理であるシッセルは、逃亡してきた凶悪な犯罪者アングマークを捕らえる指令を受けるが、慣れない風習に戸惑い、あと一步のところを取り逃がしてしまう。この特異な文化を持つ仮面の世界で、シッセルは凶悪犯を見つけ出すことができるのか……（「**月の蛾**」）。
- 基本的にはSF作家として知られるヴァンスだが、ミステリも書いている。両方の要素を持つ作品も多く、傑作ぞろいのこの短篇集の中でも集中ベストと目される中編「**月の蛾**」はその代表作だ。エキゾチックな**異星の文化を背景にした推理の過程**を経て、**最後の大逆転劇**、その後に残る**深い余韻**に至るまで、ヴァンス特有の魅力がたっぷり詰まった佳作である。（担当・渡辺睦）

S F とミステリの接点

- 瀬戸川猛資「メルクマールとなる存在がポーで、幻想小説を科学で割り切ったのがS Fで、論理で割り切ったのが本格ミステリであるというそこが接点という気はするね」
- 鏡明「ミステリは基本的に縮小の方向に向かって行く」「S Fはそうじゃなくて、謎が発端で拡大していくケースが多い」
- **鏡明VS瀬戸川猛資「S Fファンはプロレス派！ミステリファンは相撲派だ！！」『別冊奇想天外・S Fミステリ大全集』（1981）より**

S F ミステリのタイプ分け

- 1 S F 的な舞台設定

ロボットもの：アシモフ『鋼鉄都市』
サイバーパンク：エフィンジャー『重力が衰えるとき』
歴史もの：ウォルトン〈ファージング〉三部作
宇宙もの：ヴァンス『宇宙探偵マグナス・リドルフ』
スチームパンク：芦辺拓『スチームオペラ』
時間もの：グリムウッド『リプレイ』
西澤保彦『七回死んだ男』等
舞台全体が異なる：ギャレット『魔術師を探せ！』

- 2 S F 的な謎が提示される

ホーガン『星を継ぐもの』ウィリス『航路』
井上夢人『ダレカガナカニイル…』等

- 3 S F 要素のあるミステリ

多岐川恭『イブの時代』宮部みゆき『震える岩』
法月綸太郎『ノックス・マシン』等

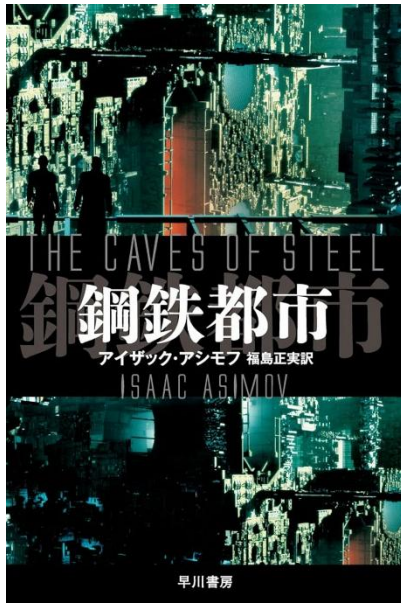
- 太田忠司・大矢博子対談資料より（名古屋S F シンポジウム2016）

SFとミステリの組み合わせ

- 私は主にミステリー小説を書いているが、SF作家の友人も何人かいて、SFとミステリーの関係性や組み合わせの可能性を時々彼らと議論する。組み合わせはふたつある。一つは「**SFの設定を持つミステリー**」、もう一つは「**謎のあるSF**」だ。前者はミステリーのような事件と構造に、宇宙船や近未来、タイムトラベルなどよく知られたSF要素を加える。後者は冒頭に不思議な謎を設置してSFのアイデアで謎を解く。例を挙げれば、『七回死んだ男』（西澤保彦）と『ソラリス』（S・レム）の違いだろう。
- 陸秋槎「中国でシリーズ2100万部以上を突破した『三体』は“**謎のあるSF**”だった」（週刊文春2019年9月12日号より）

『鋼鉄都市』 (1953)

アイザック・アシモフ (1959年8月／早川書房→1979年3月／福島正実・訳／ハヤカワ文庫SF)



- 宇宙へ進出した人類は宇宙人（スペーサー）と呼ばれ、いくつもの惑星を開拓した。一方で地球に残った人類は総人口80億を超え、いくつものドーム都市を作って、その中で暮らしている。その一つ、ニューヨーク・シティの隣にある宇宙市（スペース・タウン）で一人の宇宙人が熱線銃で撃たれて殺された。私服刑事のイライジャ・ベイリは警視総監の命を受け、最新の**ロボット刑事R・ダニール・オリヴォーと組んで事件の捜査に当たる**。懐古主義と反ロボット運動が吹き荒れる中、様々な妨害を乗り越え、回り道をしながらも、ベイリはついに真相に辿り着く……。殺人事件の捜査を軸に、ロボットの導入による大量失業者、その人的資源を活用した宇宙進出までを考察する**文明論的視座を備えたSFミステリの金字塔**。続編に『はだかの太陽』『夜明けのロボット』がある。（担当・渡辺英）

『星を継ぐもの』 (1977)

J・P・ホーガン (1980年5月／池央耿・訳／創元SF文庫)



- 月面で真紅の宇宙服に包まれた死体が発見される。**五万年以上前と推察される人類そっくりの死体の謎**に真正面から取り組む科学者たち。いくつもの仮説が提出され事態が混迷を極める中、主人公ハント博士が残された手記を手がかりに辿りついた真相とは……。言わずと知れたホーガンの出世作であり、瀬戸川猛資をして「本格推理小説そのもの」と言わしめたSFミステリの一大傑作。**暗号解読もアリバイ崩しもちゃんとある**。不可能な謎を論理的に解決していく手つきの鮮やかさ、仕掛けられた**トリックのスケールの大きさ**という点では未だに本書を超えるものはないのでは。
- ホーガン自身はその後エスピオナージュ趣味に走ってしまい、大掛かりなSFミステリに挑戦していないのが残念だ。(担当・渡辺英)

『双生児』 (2002)

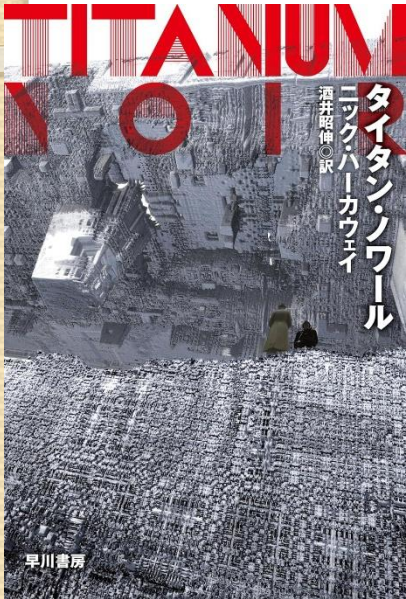
クリストファー・プリースト (2015年8月／古沢嘉通・訳／ハヤカワ文庫FT)



- 一九九九年、第二次大戦中に**英空軍爆撃機操縦士**でありながら**良心的兵役拒否者**であったというJ・L・ソウヤーに興味を持った**作家**の前に、それは父のことかもしれないと話す**女性**が現れる。父ジャックと兄弟のジョーは一卵性双生児であり、兄弟のイニシャルはどちらもJ・L。若き日には共にボート選手として活躍しオリンピックで銅メダルを獲得した二人だったが、**ジャックは空軍に入り、ジョーは結婚し兵役を拒否した**。分岐した二つの世界が描かれ、片方ではジャックが死亡し、ドイツとイギリスの和平が成立。片方ではジョーが死亡し、和平は実現しない。いったいどちらが本当の現実なのか……。 **双生児の運命を国家の運命と絡ませて**二つの世界を交錯させて描き、作者に三度目の英国SF協会賞をもたらした傑作。現実とは異なる世界を現出させ、現実を思い切り揺さぶってみせるのも優れたSFの特色の一つである。(担当・渡辺英)

『タイタン・ノワール』 (2023)

ニック・ハーカウェイ (2024年12月／酒井昭伸・訳／ハヤカワ文庫SF)



- 近未来の架空都市で殺人事件が起きる。高層アパートの自室で大学教授ロディが自身の所持する銃により殺されたのだ。警察のコンサルタントを務める私立探偵キャル・サウンダーが捜査に当たる。被害者はタイタンと呼ばれる巨人。タイタンとは、病気や事故などによりそのまま生存することが困難な人間に対して**特殊な薬T7を投与して身体を変成させ、その結果巨大化した人間**を指している。薬を開発したトンファミカスカー族が莫大な富を貯えており、その頂点に位置するのが四齢のステファンだ。ロディはどのようにしてタイタン化したのか、そして、犯人はなぜロディを殺したのか。謎が謎を呼び、読者はキャルとともに、**怪しい世界**へと踏み入っていく。

悪徳と快楽の園である怪しげなクラブ、暴力的ショー、裏社会を束ねる異形のタイタン、汚職の蔓延る警察内部などが**スタイリッシュな文体**で描かれ、さらに**手がかりの入手方法が極めてSF的**で面白い。近未来ハードボイルドの佳作である。(担当・渡辺英)

『ジャック・グラス伝 ―宇宙的殺人者―』 (2012)

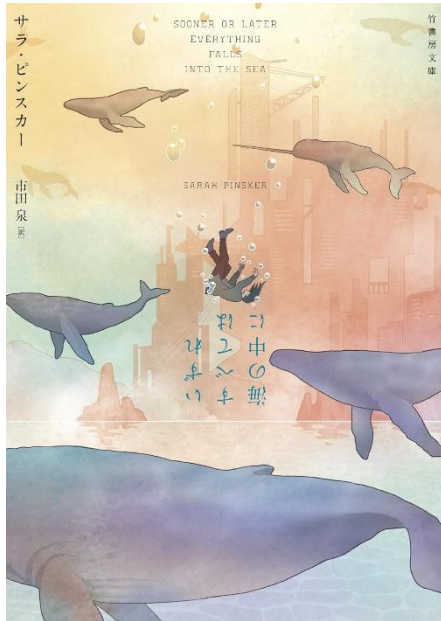
アダム・ロバーツ (2017年8月／内田昌之・訳／新☆ハヤカワ・SF・シリーズ)



- ウラノフ一族に支配された太陽系、厳しく管理された階級社会の中で人々は貧困と圧政に苦しんでいた。監視の目をかいくぐって犯罪を行うのは宇宙的殺人者ジャック・グラス……。本書は3編からなる連作短編集で、それぞれの短編には、**脱獄不可能な監獄惑星からの脱出、持ち上がらない凶器による殺人、見当たらない弾丸による殺人**という謎がある。ただ、これらの事件の犯人は本書の冒頭でジャック・グラスだと明示されている。そのため、「犯行手段は何か」「犯行動機は何か」に加え、「誰がジャック・グラスなのか」を考えて読むことになる。(担当・るり)

『いずれすべては海の中に』 (2019)

サラ・ピンスカー (2022年6月／市田泉・訳／竹書房文庫)



- 「そして(Nマイナス1)人しかいなくなった」
- パラレルワールドのサラ・ピンスカー達が招待される通称サラコンがカナダ沖の島で開催される。人生の分岐点で分かれたサラ達は様々な職業に就き、住所、経済状況、現在の家族構成もばらばら。そんな**サラ達が200人以上集まる中で、1人のサラが死体で見つかり**、保険調査員のサラは捜査を依頼される。出入りが制限され、船も警察も来ない状況でサラは戸惑いながら捜査を始める。
- タイトルから分かる通りアガサ・クリスティオマージュの、**被害者も探偵も自分**という特殊設定ミステリ。(担当・るり)

『六つの航跡』 (2017)

ムア・ラファティ (2018年10月／茂木健・訳／創元SF文庫)



- クローン技術が普及した世界。この世界ではたとえ死んでも人格をダウンロードしたクローンの身体で生き返ることができる。2500人の冷凍睡眠者を乗せた**宇宙船の中で目を覚ました6人が目にしたのは自らの他殺死体だった**。さらに出発後25年間の記憶が消され、船のAIによるこれ以上のクローン再生も不可能にされていた。雑用を任されがちな保守係兼機関長補佐マリア、厳しい艦長カトリーナ、細かい副長ウルフガング、明るい航海士ヒロ、冷静な船医ジョアンナ、気弱な機関長ポール。この6人が消された記憶を探るために船内を調べはじめるが、各人の秘密が徐々に明らかにされていく (担当・るり)